

第3回 パーキンソン病とパーキンソニズムの違い

〈監修〉市川 忠先生 (埼玉県総合リハビリテーションセンター 神経内科)

……パーキンソニズムとは何ですか？

パーキンソン病の運動症状では、動作が遅くなる(動作緩慢、無動・寡動)ことが最も重要な症状で、これに加えて手足や体幹がこわばる(筋強剛)、手足がふるえる(振戦)、倒れやすくなる(姿勢保持障害)のうちのいずれか1つの運動症状があれば、パーキンソン病の疑いがあると診断されます¹⁾。そして、これらの症状をパーキンソニズムまたはパーキンソン症状といいます。パーキンソニズムを引き起こす病気は、パーキンソン病以外にもたくさんあり、治療法や対応法も病気によって違いがあります。そこで、それぞれの病気に適した治療をするために、正確に診断することがとても大切です²⁾。

●パーキンソニズムの種類

パーキンソニズム (パーキンソン症状)

診断の際、必須の症状



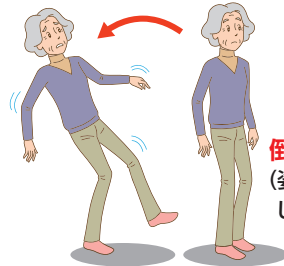
動作が遅くなる
(動作緩慢、無動・寡動：
どうさかんまん、むどう・かどう)

必須の症状に加え、どれか1つの症状でパーキンソン病の疑い

症 状



手足や体幹がこわばる
(筋強剛：きんきょうこう)



手足がふるえる
(振戦：しんせん)

倒れやすくなる
(姿勢保持障害：
しせいほじしょうがい)

同じ症状でも
原因となる
病気が違います。



武田篤(柏原健一ほか編)：みんなで学ぶパーキンソン病、南江堂、東京、pp10-15 2013.より作成

原因となる
病気

神経変性疾患
(パーキンソン病を含む)

パーキンソン症候群
(お薬の副作用、小さな脳梗塞など)

……パーキンソニズムを起こす病気にはどのようなものがありますか？

パーキンソニズムを起こす病気は、パーキンソン病のほかの神経変性疾患では、多系統萎縮症^{たけいとういしゅくしょう}(MSA)、進行性核上性麻痺^{しんこうせいかくじょうせいまひ}、大脳皮質基底核変性症^{だいのうひしつきていかくへんせいしょう}などがあり、パーキンソン症候群には、薬剤性パーキンソニズム、脳血管性パーキンソニズム、正常圧水頭症^{せいじょうあつすいとうしょう}などがあります。このほかインフルエンザ脳症の後遺症や練炭などの一酸化炭素中毒の後遺症などで現れることもあります²⁾。

●パーキンソニズムを呈する神経変性疾患とパーキンソン症候群

神経変性疾患

脳神経が何らかの原因で抜け落ちる、パーキンソン病とよく似た病気。初期にはパーキンソン病との区別がむずかしいことが少なくありません。

・多系統萎縮症 たけいとう いしゅくしょう

病気の初期から排尿障害などの自律神経の乱れ(自律神経症状)が現れ、飲み込みが悪くなったり、睡眠中のいびきや無呼吸が目立ったりします。

・進行性核上性麻痺 しんこうせいかくじょうせい まひ

目の動きが悪くなる、すくみ足などの症状がみられ、病気の初期から転びやすくなるなどが現れます。

・大脳皮質基底核変性症 だいのう ひしつ きていかくへんせいしょう

ある特定の動作ができない、言葉の扱いがむずかしくなる、片側の空間にあるものを認識しない、片手が勝手に動く、認知症などの症状もみられます。

パーキンソン症候群

・薬剤性パーキンソン症候群

服用した薬の副作用として起こるもの。抗精神病薬などで生じやすいのですが、一般的に使われる制吐薬や抗うつ薬で起こることもあります。薬の減量や中止で症状は改善します。

・脳血管性パーキンソニズム

小さな脳梗塞が多発した場合、運動機能が障害され、パーキンソン病とよく似た症状が現れることがあります。脳血管障害の再発予防を目的とした薬物治療と、血圧や血糖値などのコントロールが治療の中心になります。

・正常圧水頭症 せいじょうあつすいとうしょう

頭蓋の中を満たしている髄液の流れが滞り、脳を圧迫することで起こります。歩行障害、尿失禁、認知機能障害が代表的な症状。手術で症状の改善が期待できます。

武田篤(柏原健一ほか編)：みんなで学ぶパーキンソン病。南江堂、東京、pp10-15 2013。
柏原健一(監修)：パーキンソン病のことがよくわかる本。講談社、東京、pp18-19 2015.より作成

…………パーキンソン病とそれ以外の病気の区別の仕方を教えてください

パーキンソニズムを起こす病気の中には、パーキンソン病との区別がむずかしい多系統萎縮症、進行性核上性麻痺、大脳皮質基底核変性症がありますが、特に病気の初期には区別がむずかしいため、はっきりと区別できるまでに長い時間がかかることもあります³⁾。一方、これら3つの病気以外は、MRIなどの画像検査や患者さんから病歴を聞くことで区別できます。

次のような場合には、パーキンソン病以外の病気の可能性があります。症状が左右対称に出る、進行が早く、早期から転倒する、パーキンソン病治療薬(主にL-ドパ)の効きが悪い、などです⁴⁾。

●パーキンソン病以外の病気の可能性がある場合の特徴

- ① 症状が左右対称に出る
- ② 進行が速い、早期から転倒する
- ③ 早期から認知機能障害や強い自律神経症状(立ちくらみ、排尿障害など)を伴う
- ④ パーキンソン病治療薬(主にL-ドパ)の効きが悪い

パーキンソニズム以外にも、ふるえだけが起こる「本態性振戦」ほんたいせいしんせんという病気があり、この場合はパーキンソン病とは逆に、何かしようとするときふるえが強くなります。パーキンソン病では静かに休んでいるときなど、体を動かさないときにふるえが出ます。パーキンソン病で出るふるえを「安静時振戦」あんせいじしんせんと呼んでいます。

村田美穂(監修)：スーパー図解パーキンソン病。法研、東京、pp46-47 2014.より作成



市川 忠先生
からのコメント

パーキンソン病と確定診断をすることは非常に難しいことがあり、特に病初期では困難です。日頃の症状(特に転倒しやすさ、歩行の状況)が経過とともにどのように変化するかを主治医に知らせてください。特に薬剤効果の経時的な変化は区別のうえで最も重要になります。

参考資料

1)パーキンソン病診療ガイドライン作成委員会(編)：パーキンソン病診療ガイドライン2018。医学書院、東京、pp2-3 2018。
2)柏原健一(監修)：パーキンソン病のことがよくわかる本。講談社、東京、pp18-19 2015。

3)武田篤(柏原健一ほか編)：みんなで学ぶパーキンソン病。南江堂、東京、pp10-15 2013。
4)村田美穂(監修)：スーパー図解パーキンソン病。法研、東京、pp46-47 2014。